

# 【広報佐野日大・号外】陸上競技部・サッカー部 全国大会特集号

令和5年1月10日（火）発行

## 【陸上競技部】全国駅伝 大健闘！！「チーム力発揮」一時12位、全国20位！

12月25日（日）、京都市たけびしスタジアム京都を発着点とする第73回全国高校駅伝競走大会が行われ、7区間42.195kmをたすきでつなぎ、本校は2時間6分40秒で全国20位となった。

チームのエースが集まることが多く、一番プレッシャーがかかる1区は山口彰太（3年・足利・第二中）が28位で通過。その後、2区長岡蓮人（3年・益子・益子中）が5人抜き。長岡は苦しい時期を乗り越え、この大会は「これまでチームにも迷惑をかけてきた。その恩返しをしたい」という想いで走った。続く3区は、兄弟の彰太とともにこれまでキャプテンとしてチームを引っ張ってきた山口聡太（3年・足利・第二中）。4人抜きの力走を見せ、キャプテンとしての責任を果たした。その流れに続いて、4区の大島福（1年・那須塩原・厚崎中）。「将来は日本代表選手になる」という目標を持ち、本校に入学した。区間10位の走りで7人をかわし、一時12位まで浮上。その後の5区から7区も、最後まで粘り強い走りを見せ、20位でゴールした。（全47校）

2005年に記録したチーム最高の10位を上回る「8位入賞」という目標は果たせなかったが、岩本監督は試合後、「みんなでつないでよく頑張った」と選手たちを称えた。また、「今の3年生は1年生の時からコロナで始まった学年。様々な逆境もあった中、およそ2年半、ずっと私を信じて本当によくついてきてくれた。そして、全国大会当日はもちろん、それ以前から本当に様々な人々の協力や応援が力になった」と当時を振り返る。「人間万事塞翁が馬。明確な目標を持ち、どんな状況に置かれても冷静に、今その瞬間に最善を尽くすこと。その積み重ねが人生となる。」岩本監督が常々伝えている言葉。この言葉通りに、選手たちはベストを尽くし、やり切った。そして、選手たちの想いは次の代へと託された。



区間10位の走りで7人抜きをする大島さん

## 【サッカー部】祝 全国ベスト8！！ どんな相手にも最後まで戦い抜き、粘り強い守りで優勝候補・履正社を撃破

### ～全国高校サッカー選手権 活躍の軌跡～

12月31日（土）、初戦となる第2回戦。相手は奈良育英高校。静かな序盤から徐々に流れをつかみ、後半からは本校が攻める場面が目立つようになるものの、0-0のスコアレスのままアディショナルタイムへ。左サイドからフリーキックを得ると、こぼれ球の流れから、FW中埜信吾（3年・目黒・東山中）が押し込み、最後の最後に先制点を決め、これが決勝点となり、奈良育英高校に勝利する。

1月2日（月）、第3回戦。相手は高校年代最高峰と言われるプレミアリーグに所属する履正社高校（大阪）。ここまでの2試合で10得点を挙げ、優勝候補の一角に挙げられる強豪である。しかし、本校の選手たちは、まったく怯む気配はない。ボールを支配される展開となるが、本校も5-4-1の堅固な守備ブロックで隙を与えない。むしろ、履正社高校が本校を攻めあぐねているかのようにすら見えた。本校はロングスローやフリーキックなどセットプレーから一発を狙う。後半立ち上がりの42分、DF大野結斗（3年・つくば・春日学園義務教育学校）の

ロングスローのこぼれ球をDF青木柁（3年・熊谷・玉井中）が豪快に蹴り込み、ゴール！「絶対にチャンスがある」、海老沼監督のその言葉を信じ、ついに巡ってきたその「ワンチャンス」をモノにして均衡を破った。

その後、追われる立場となった本校に対し、さらなる攻撃の圧力が強まり、一方的に押し込まれる展開に。しかし、猛攻にもものともせず最後まで粘り強く耐え抜く選手たち。1点を許したものの、1-1の同点のまま試合終了を迎える。PK戦に突入すると、GK平岡倅輝（2年・日立・坂本中）が3人目のキッカーをストップ。対する本校は5人全員が成功。前評判を覆し、ついに履正社高校に勝利！準々決勝への切符を手にした。そして、1月4日（水）の準々決勝の相手は岡山学芸館高校（岡山）。0-4で敗れたが、本校は今大会、全国ベスト8という結果を残した。（全



PK後の勝利決定の瞬間に歓喜の声をあげる選手たち 48校）

選手権終了後の1月5日（木）、本校本館1階で「報告会」が行われ、サッカー部保護者・教職員で選手たちを出迎えた。海老沼監督は、何よりも選手たちへの応援に対する感謝を述べ、今回の結果への悔しさを滲ませつつも、力を尽くした選手たちを称えた。渡邊校長は全国ベスト8という快挙を称え、強敵に対しても練習の成果を遺憾なく発揮し感動を与えてくれた戦いぶりに感謝を述べた。そして、挫折の中から更なる飛躍に向けた気持ちを再確認できることもスポーツの素晴らしさであると伝え、この活躍をそれぞれの人生の新たなスタート地点としてほしいと選手たちの悔しさにも心を寄せた。主将の江沢匠映（3年・ふじみ野・葦原中）は、全国で1番の素晴らしい声援のおかげで全国ベスト8という成績を残すことができたことに感謝し、明るく一体感のある素晴らしいチームで戦えたことへの誇りを述べた。

## 【結びに】

陸上競技部は5年ぶり19回目の全国駅伝、サッカー部は6年ぶり9回目となった全国選手権大会。本校陸上競技部のたすきをつなぎ最後まで走りぬく雄姿、サッカー部のどんな相手にも精一杯最後まで努力する姿に、私たちは大きな感動と勇気をもたらした。努力を怠らず、仲間と共に常に切磋琢磨してきた、佐野日大高校陸上競技部・サッカー部の選手たちを誇りに思う。そして、生徒・保護者・教職員・その他本校に関わるすべての人が、「応援」を通して「心は一つ」であり、「強い絆」で結ばれていることを深く確信することができた。私たちはこの経験を糧に、さらなる飛躍に向け、力強く歩み続ける。